

兵をもって包圍し、秀吉の動座を待つて、その眼前で猛攻して、上方勢のすごさを見せ、九州の田舎武士たちへの見懲<sup>みこら</sup>しめとした。この城攻めの様子は、すぐ秋月種実の籠城軍にも聞こえ、種実も、秀吉軍が城下へ到着する前に、頭を丸めて、秘宝「檜柴」を捧げて命乞いし、命だけは赦された。秀吉は、あまり多くの犠牲の出ない小城を強攻して皆殺しさせ、上方勢の威力を誇示し、周辺を威圧するという手法を、このころは得意としていた。

### 三 九州征討の終わり

羽柴秀長への 秀吉はその後一気に薩摩境まで下り、五月  
指示と豊前支配 八日、島津義久が自身「一命を捨て走り入

る」(『島津文書』)姿をみせたので赦免し、薩摩一国を宛行つて、九州征伐を終わった。

天正十五年五月十三日、秀吉は弟秀長へ次のような指示を与えた。①豊前の不要な城は破却し、馬ヶ岳城と豊後境の城(妙見岳カ)とが離れすぎているならば、その間に一城普請すること ②国々の者どもへ知行を与えるので、忠不忠を糺<sup>ただ</sup>し、諸事油断なく申し付け、毎日でもこまごまと報告して、秀吉の指示



秀吉の弟 羽柴秀長の花押



島津義久の花押

を請うこと。秀吉は、弟秀長とこのような細やかな連絡をとりつつ、豊前地方支配の方策を固めていった。黒田孝高の中津築城は、このとき既に構想されていたと考えられる。

### 九州分目

六月七日、箱崎八幡宮まで戻ってきた秀吉は、二〇日余り、ここにとどまり、博多の町割りをし、バテレン追放令を出し、筑前国以下の仕置きを行った。すなわち、小早川隆景に筑前一国と肥前・筑後に二郡ずつを与え、秋月種実の子種長に日向財部三万石、立花統虎に下筑後三郡、討ち死にした高橋紹運の子統増むねまさに筑後三池郡を与え、筑前のそれぞれの旧領を明け渡させた。

香春岳に拠よった高橋元種は日向国の県あかた（延岡市）へ移した。七月三日、赤間関へ渡海したあと、秀吉は豊前の仕置きを發表し、八郡の内、京都・仲津・築城・上毛・下毛・宇佐の六郡を黒田孝高に、企救・田河二郡は毛利壹岐守吉成に与えた。ただし、妙見岳・竜王両城知行分は秀吉蔵入地として除かれた。

## 第二節 黒田氏の入封

**黒田孝高の法令三力条** 黒田孝高は、まず馬ヶ岳城へ入城したが、やがて、下毛郡の中津川河口に中津城を築いて移った。これは、秀吉の意向を汲んで、上方との連絡の海上便と鉄砲を使用する戦いに対応する

城郭を考へてのことであろう。

黒田孝高は、天正十二年（二五八四）七月には、播州揖東郡内いとうに一万石、宍粟郡一職しそ（二〜三万石）を与えら